継続したコミュニケーションの必要性

労働者委員　村屋　高広

昨年９月に組合専従の任務が終了し４年ぶりに元の職場に帰った。

組合の専従をしている時は第一に「組合員の悩み」を聞くこと、第二に「働きやすい職場環境の整備」、第三に「組合加入率」を向上させることを中心に活動してきた。自分なりにはこの４年間の活動は満足しているが、一組合員がどう思っているのかはわからない。

ここ数年、新卒採用者が多く入社しており、私の職場にもここ３年間で６人が新卒採用入社していた。現場復帰、初日にこの若者に聞いてみた。「この職場はどう？何か困ったことはない？」と聞くと、即答で「何もないです」６人ともほぼ同じことを言い返してきた。「仕事以外の事でも相談にのるよ」と言ってみたが、予想通りではあったが「大丈夫です」と返ってきた。まずは４年間のブランクはかなり大きいことに、あらためて気づかされた。

４年間の組合専従期間にも各職場をまわる機会に２０歳代の社員へ「何か問題がないか、困ったことはないか」声をかけていたが、返ってくる言葉は「何もないです、大丈夫です」がほとんどであった。

このことに対してよく「ゆとり世代だからしょうがないよ」と言われてきた。本当にそうだろうか？私は諦めが悪い方で、まずは毎週この６人に他愛もない事でもいいから話しかけることを決意し継続している。継続は力なり、現在はわりと話もできるようになってきた。

とある日、突然ではあったが入社２年目の社員が「担務が偏っている、平均的にできるようにしてほしい」と初めて担務ローテーションへの不満を言ってきた。私もすかさず「そうだね、だったら君はどうした方がいいと思う」と聞いてみた。返ってきた言葉は「順番にローテーションできるように訓練する」であった。そこで翌日、この６人と話をし、皆がどう考え、思っているのか聞くと、みな同じように訓練した方がいいと結論が出た。

今回の事例で感じたことは「継続して話しかけることの重要性、コミュニケーションの必要性」であった。

労働委員会のメンバーになって約２年が経過した。２年間の短い期間ではあるが使用者・労働者からの相談を数件受けてきた。ここでも感じていることはコミュニケーション不足からお互いがすれ違い、いつの間にか敵視している。話すこと、コミュニケーションがいかに重要かをつくづく感じさせられている。私は労働者委員として相談を聞く際に「お互いよく話をしましたか？相手の話を十分聞きましたか？」と聞くように心がけている。労働相談に来ていただけることはありがたいが、来る前にもっと当事者同士が話し合った方が解決できる場合

が多くあると感じている。

しかし、トラブルが発生し「お互いが十分話をして、相手の話をもっと聞きなさい」と言っても感情的に無理がある。だからこの間を取り持つ「誰か」が必要になる。労働委員会で言えば三者構成の各委員が間を取り持つ「誰か」になってくる。人と人とのコミュニケーションをより良くするためには「話を聞いてくれる人の存在」もかなり重要になってくる。

職場も労働委員会も、自分の置かれている立場はかなり重要になることをあらためて感じている。そして、今後もコミュニケーションを大事にしながら「相手の話を聞く」ことから始めたいと思う。